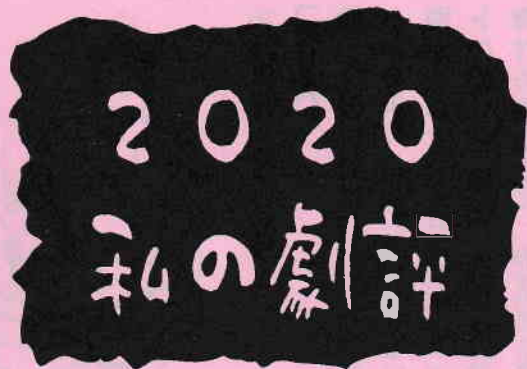


あなたにとって芝居とは、  
そして、旭川市民劇場とは？  
一年を通して、見えてき  
たこと、感じたことを投稿  
いただきました。



## 旭川で演劇を観続けるために

感想会大好き人間

今までの「当たり前」が崩されていく景色をいくつも見せつけられた年でした。その原因は、新型コロナウイルスの感染拡大によって発出された緊急事態宣言による自粛要請、不要不急という言葉です。

この言葉で人の行動が制限され、心までも萎縮させられたように思います（その呪縛は解けているでしょうか）。そして演劇など文化・芸術は計り知れない打撃を被りました。こうした厳しい状況の中でも六例会開催できたのは、市民劇場が演劇鑑賞を運動として取り組んできた歴史の積み重ねがあったからではないかと思えます。

演劇は舞台と観客が一体となって創り上げるものである

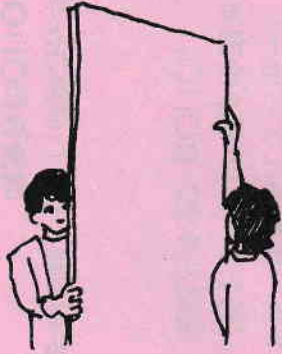
と言われていますが、前後、左右ひとつづつ空けた席に座り、声を出さずじつと舞台上に目を凝らし、耳を澄まして観る光景を目の当たりにしたとき、そのことをあらためて実感することができました。それは厳しい環境のもとでも演劇を観ることができたからです。

市民劇場は私が生きていくうえでかけがえのない存在です。サークルが年一回例会の運営担当を担い、最初から最後まで運営にあたるという方法がとても新鮮です。人との出逢いは求めて叶うものではありません。しかし、市民劇場に足を運ぶ事でそれが叶うのです。こんな恵まれた環境が傍にあるのです。そこで話されることは、演劇のことはもちろん、社会のこと、ときには人生についてなど、とても豊かな話にあふれています。

これが市民劇場を支えている原動力になっているのではないかと思います。

十月例会「送り火」は私の琴線を揺さぶる記憶に残るお芝居でした。「何かを始めることに遅いことはない」というメッセージに勇気をもらいました。それは年齢を超えて普遍的ともいえるものだからです。このようなお芝居を観たい。観続けたいのです。確かに人が集まることへのためらいがあり、いつものようにとはいかない現状がまだあります。しかし、これ乗り越えるためには、会員一人ひとりの「旭川で演劇を観続けたい」という思いを体现することが必要ではないかと思えます（それぞれの一步です）。

私は「学び舎」である市民劇場をなくしたくありません。心に潤いと豊かさ、そしてなにより想像力を育むことの大



二〇二〇年八月七日、勇気を持って市民文化会館に向かう。加藤健一に会いに……笑い涙の舞台。そして「時代の歌がいつまでも心に残る。得体の解らぬウィルスに侵され生命が奪われた人たち、そ

今こそ演劇を!!

切さを教えてくれる演劇を旭川で観続けたいのです。  
市民劇場（演劇）と出逢えた喜びを忘れず、もう一人の自分との出逢いを追求め続けています。

して遺族の無念さを感じる度に、あの舞台が重なる。コロナ禍の中で舞台に立てる喜びが身体の内から溢れる役者たちの死人とは思えぬ軽やかさにふつと笑みがこぼれてくることも。十月例会はお盆。「自粛」と騒がれる中で、戦時中を想像させられる日々であるからか、日色ともゑの息づかに合わせて私も呼吸し、いつしか照の感情に入っていくという不思議な時間であった。「童話を書く」という兄とのやりとり、ほつと明かりがともされ、穏やかに、送り火を見つめることが出来たよう。台詞が聞きとれず、半減の感もあるが、舞台への集中は今までの例会では考えられない私であった。役者と観客が一つになつての舞台は、決して不要ではないと確信する二〇二〇年であった。

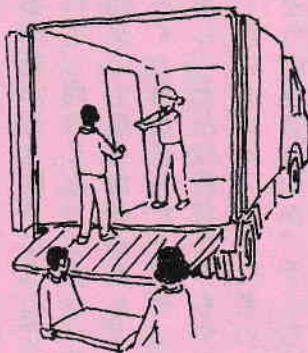
(七〇代女性)

二〇二〇私の劇評

今年度の芝居は「燦々」を見ることが出来なくて残念でしたが、あとの五回は観劇できました。特に心に残ったのは、「送り火」と「八月の人魚たち」です。

「送り火」では、後半の照が兄の亡霊を前にして、これまで誰にも言えなかった思いを、しみじみと語るところでした。大声ではないけれどしんみりとした語りでした。耳にも心にも伝わりました。さすがベテラン女優さんだと感動しました。

「八月の人魚たち」は、年末の三か月連続の劇の中で、前の二作品にはない舞台の明るさに、現実の真冬の寒さを忘れて明るい気分になりました。五〇代に入つたばかりの私は、彼女たちがくり広げるやりと



りを、今の自分、これからの自分のことを重ねながら、観ていました。  
コロナの中、まだまだ大変な状況が続きますが、またいろいろなスタイルの芝居を観れるのを楽しみにしています。

(五〇代女性)



## 二〇二〇私の劇評

井上作品をこよなく愛する私

(加藤健一事務所)

### 1. 二〇二〇年六例会の感想

#### 二月例会『燦々』(てがみ座)

シーボルトと花魁のくんだり  
が、お栄の大きな転換点にな  
ったことが、わかりやすく描  
かれていた。演じた前田亜季  
さんが良く演じていた。舞台  
美術がとても斬新だった。作  
者長田育恵さんの脚本の面白  
さを感じた。別の作品で再度  
観てみたい。

#### 四月例会『イヌの仇討』

(こまつ座)

忠臣蔵を吉良上野介の側か  
ら描き、しかも隠れ部屋の中  
での二時間の舞台で全てを見  
せてしまう、井上さんの脚本  
が凄い。脚本の面白さに役者  
の演技がついていけなかった  
点はあるかもしれない。

#### 八月例会『煙が目にしみる』

この作品は、脚本が良くで  
きている。葬儀コメディとい  
う特異な設定が面白い。特に  
おばあちゃんが巫女(いたこ)  
になり、家族の思いを故人に  
伝える場面に引き込まれた。  
大団円の終り方も良いと思う。  
しかし、初演の時の『煙…』  
に軍配が上がるかな。

#### 十月例会『送り火』(劇団民藝)

芝居全体から感じる静謐な  
佇まいが何とも言えず素晴ら  
しかった。日色さんの四国こ  
とばの台詞の美しさに感動し  
た。戦争の記憶がどんどん風  
化していく中で、戦争に人生  
を翻弄された人々を描くこと  
の意味をあらためて感じた。  
二幕目の兄の出現で俄然舞台  
に引き込まれた。主人公の照  
が絶望で人生を終えるのでは  
なく、今まで背負ってきた重  
荷をおろし、わずかではある  
が次の希望に向かって一歩踏

み出すところが良かった。そ  
して、その一步を踏み出すの  
に遅すぎることはない、まだ  
時間はある、というメッセー  
ジにも共感できた。私は、こ  
の作品が昨年の例会の中では、  
一番良かったと思う。

#### 十一月例会『ひとごころし』

(前進座)

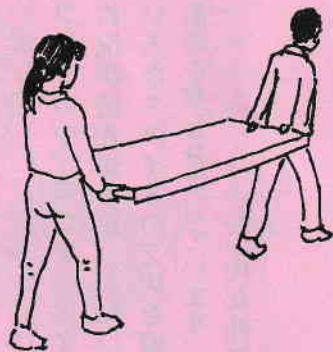
剣豪に対して剣ではなく何  
で立ち向かうのか、臆病者が  
どのように仇討をするのか、  
この設定がとても面白いと思  
う。この作品は、弱い者が強  
い者に、小さな存在が巨大な  
存在に対する時に、どう対処  
するのか。いろいろと考えさ  
せてくれる。しかし、ほとん  
ど何も無い舞台は、想像力を  
働かせるにしても、なかなか  
難しいと思う。

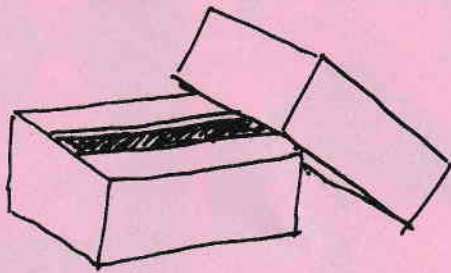
#### 十二月例会『八月の人魚たち』

(テアトル・エコー)

予想していた以上に面白か  
った。始まりの部分は、出演

者の台詞がきんきん響くよう  
で騒々しく、なかなか芝居に  
入っていきなかった。しかし、  
彼女たち五人がそれぞれ抱え  
る問題が浮き彫りになるにつ  
れて、面白くなってきた。仲  
間がいて集う場所がある。す  
ごく大事なことだと思う。し  
かし、そんな彼女たちもやが  
て老いていく。そんな老いと  
どう向き合うのか。そこも見  
所のひとつだと思う。しかし、  
翻訳劇にはもうひとつ馴染め  
ない。





## 2. 自分にとっての芝居の面白さや醍醐味について

自分の中で、芝居の観方が変わったのは、還暦を過ぎた頃から。ある会員の方が、運営担当サークル会議の中で話した言葉がきっかけになった。それは、「優れた芝居というのは、芝居の向こうに自分の姿が見えてくるような芝居」という言葉だった。その時には、その意味することがよく分か

らなかった。しかし、芝居を観ていく中で、いろいろな人のいろいろな人生を芝居の中で追体験するが、実は自分との関わりの中で観ているということが、だんだんと分かってきた。それから、今まで以上にしっかりと芝居を観るようになった。観終わったあと、今まで以上にその芝居を振り返ってみるようになった。観た芝居を振り返る時には、「劇評集」への投稿と「感想会」への参加を活用している。振り返ってみることで、観終わった例会作品について、自分ほどのように感じたのかをもう一度整理できる。そして、自分との関わりの中で、いろいろと考えることができる。芝居の作品個々の面白さを味わうと同時に、間違いなく心の栄養にもなっているのではないかと思う。

(六〇代男性)

## 二〇二〇年私のベスト3

燦々は舞台設定がよくわからず、お芝居も物足りなさを感じた。イヌの仇討の舞台設定は、久々にお芝居を観るのだと思うほどの舞台で、始まるのをワクワクして待ちました。お芝居はまあまあでしたが、いまだにイヌは誰なのかわかりません。

煙が目にしめるは、コロナウイルスでお芝居が一本延期になり時間があつたせいとか、舞台設定も良く見え、お芝居も、広い市民文化会館の割にはセリフも良く聞こえました。ラストの歌では感動しました。

送り火は、舞台設定が懐かしく、お芝居も静かな中に考え深い内容でした。お兄さんの送り火焚いてくれるかに涙しました。

ひとごろしは、あまりにも

簡素化しすぎではないかと思えるほどの舞台設定（手抜きでは）。お芝居も四人の役者さんが一生懸命演じているのですが、時代ものは少しそれらしいスタイルにしてほしかったのと、役者さんが色々な音まで出さなくてもよいのでは（楽しみにしていましたが、延期までして観なくてもよかつた気がした）。

八月の人魚たちは、舞台設定は良いのですが、あのパネルは要らなかつた気がする。波の音・音楽で十分海辺のリゾート想像が夫斯基。四十年代から七十代まで演じ、ラストの衣装が今一つだった。四人とも白系の衣装はおかしい。

結果 一位送り火 二位煙が目にしめる 三位イヌの仇討 ちなみにその他は、四位八月の人魚たち 五位燦々 六位ひとごろし

(七〇代女性)